

2019 年度

東洋大学審査学位論文の要旨

在日コリアン教会の歴史的展開に関する社会学的研究

—エスニック・チャーチの継承／変容に注目して—

社会学研究科 社会学専攻 博士後期課程

4510150001 荻翔一

本研究が対象とする在日コリアン教会（在日コリアンが中心となって設立したプロテスタント教会）は、いわゆるエスニック・チャーチとして戦前から戦後にかけて各地に設立された。戦時下には日本の教会への編入を余儀なくされ、エスニシティを強調することを抑圧された。終戦後は日本の教会から脱退し、紆余曲折がありながらも各々の教会はエスニック・チャーチとして再建を果たした。

しかし、日本社会における在留外国人の増加にともなう多文化化（1980年代～）や、韓国社会における韓国キリスト教の急成長（1960年代～）とその後の海外布教の活発化（1990年代～）を背景に、1980年代以降、在日コリアン教会にも韓国系ニューカマー（や日本人など）が集うようになった。教会内における在日コリアンの存在が、「オンリーワン」から「ワンオブゼム」へと変化した。それを受け、各教会では従来のエスニック・チャーチとしての在り方の見直し／刷新といった動きがみられるようになった。

そこで本研究では、これまで国内の研究でなされてこなかったエスニック・チャーチの継承／変容に着目し、①終戦後から1970年代までの在日コリアン教会の歴史的展開を明らかにしたうえで、②1980年代以降の教会内の多文化化への対応策（組織マネジメント）の特徴を分析することを通して、変容パターンを析出すること、③変容パターンを左右した組織マネジメントの規定要因を明らかにすることを主目的とした。

在日コリアンの宗教を扱った先行研究では、歴史的展開を取り上げているものの、エスニック・チャーチの継承／変容という観点からは詳細に分析されてこなかった。それゆえ、本論文の関心から言えば重要な出来事である、本国から新たに来日した人々（韓国系ニューカマー）の参与にそれほど注目がなされてこなかった点は課題だといえる。またその他にも、在日コリアン教会の大半が所属する超教派の在日大韓基督教会以外の事例がほとんど扱われてこなかったことや、教会が立地する地域社会の与える影響についても、ほとんど考慮されていなかったことが課題としてあげられる。

そこで、分析視点として、本論文では在日コリアンと韓国系ニューカマー（新旧コリアン）をコリアン社会内部の下位集団、すなわち、サブ・エスニック集団として措定し、分析に組み入れた。新旧コリアンは、同じコリアンであり同一のエスニック集団に属する。しかし、両者は来日の時期や経緯が異なるがゆえに、文化的差異や出身地（ホスト国）との関わり方の違いが大きいことに加え、受容してきたキリスト教のスタイルが少なからず異なることから、同じキリスト者であっても教会の奉仕活動への取り組み方や礼拝スタイルなどに違いがみられるといえる。この両者の関係、差異に注目しながら分析することとした。

また、各教会の組織マネジメントの方向性を規定した要因として、長老制（聖職者である牧師と信者の代表（おおむね古参信者）である長老が合議の末、教会運営を行っていく教会政治制度）における牧師 - 長老間の力関係のグラデーションと、各教会が置かれた地域的なコンテクストの2点を仮説的に提示した。

本研究の主な調査方法は、文献調査、聞き取り調査、参与観察である。

調査対象については在日コリアン教会の様々な展開上のバリエーションを明らかにするという観点から、組織形態や地域が異なる複数の教会を扱った。第一に超教派の在日大韓基督教会に所属する大阪教会（大阪府大阪市生野区）、第二に朝鮮のホーリネス系の宣教師によって設立され、現在は日韓双方のホーリネス教団に属する広島第一教会（広島県広島市東区）、第三にアメリカの

宣教師の援助によって設立され、現在は単立教会である東京福音教会（東京都荒川区）である。渡戸一郎の類型によれば、生野区や荒川区は典型的な「オールドタイマー中心型」 - 「大都市インナーシティ型」の外国人集住地域である（渡戸 2006: 119）。広島市も同類型に準ずるものとして本論文では位置づけた。同類型はオールドタイマーが中心でありながらも大都市に位置するため、韓国系ニューカマーが集う傾向にあり、新旧コリアンの混在化がみられやすい地域だと考えられる。ただし、同類型内でも地域によってその特色は異なるため、各地域の特徴と教会の変容をリンクさせて考察することとした。

各事例を分析した結果は次の通りである。

本論文で扱った在日コリアン教会は戦後、在日コリアン人口の減少や南北分断による同胞間での対立状況の中で、少なからず困難さや葛藤を抱えながら、エスニック・チャーチとしての再構築・維持がなされていた。

1960年代から1970年代にかけて構成員が在日コリアン二世へと世代交代していく中で、1980年代以降、グローバル化を背景とする韓国系ニューカマーが参与する事態が生じた。これによって、在日コリアン教会では牧師の確保が容易になるとともに信者の増加がみられるようになったが、多くの韓国系ニューカマーを抱えるようになった教会の中には、それまでの在日コリアンのためのエスニック・チャーチとしての理念や活動内容を維持存続することが難しくなっていたものもあった。一方で、韓国キリスト教的なスタイルを内面化し、奉仕活動に熱心に取り組み、教会を実質的に支えるようになってきた韓国系ニューカマーをいかに受け入れるかという包摂の在りようと在日コリアンのためのエスニック・チャーチとしてどのように維持・継承するのか（しないのか）が各教会で課題となった。そこで組織マネジメントが行われ、教会の理念や活動面の見直し・刷新につながった。

各教会の組織マネジメントからその変容パターンを分類すると、大阪教会は、在日コリアンのためのエスニック・チャーチとして部分的に持続しながら、韓国系ニューカマーを含むマイノリティ全般を包摂するような理念を掲げ社会活動を展開していた。これは、在日コリアンという「中核」的な集団に配慮しつつ、包摂する対象を拡張していくといった意味で①「拡張型」だといえよう。

広島第一教会は、在日コリアンのためのエスニック・チャーチとしての形態からは「脱皮」し新たに日本宣教を掲げ活動する一方で、韓国系ニューカマーを日本人よりも優先されない存在として扱いつつ包摂するような取り組みもみられた。これは、在日コリアンのコンテキストとは断絶した活動を展開し、日本人や韓国系ニューカマーを包摂している点で②「変質型」だといえる。

東京福音教会は、在日コリアンのためのエスニック・チャーチとしての運営体制を依然として維持しつつも、韓国系ニューカマーのニーズも状況に応じて部分的に反映させてきた。これは在日コリアンという「中核」的な集団を最優先と位置づけつつ、他の集団もそれに反しない程度に包摂しているという点で③「重層型」というように分類することが可能だろう。

続いて、組織マネジメントを規定した要因について考察した。

信者の代表として古参信者を教会運営の中核に参与させる長老制は、原理的に言えば「伝統」を保持しやすいため、在日コリアンのためのエスニック・チャーチとしての形態が維持されやすい運営形態だといえる。一方で、長老制を採用していても牧師が教会運営の主導権を握ってい

ば、その「伝統」に配慮する必然性はなくなる。各教会の組織マネジメントをみると、広島第一教会では、韓国系ニューカマー牧師が教会運営の主導権を握っていたため、日本宣教というそれまでの「伝統」に依拠することのない活動を展開し、東京福音教会はそれとは対照的に、在日コリアン長老がその主導権を握り、「伝統」に則った教会運営が行われていた。大阪教会では、牧師と長老が比較的均衡を保っていたため、「伝統」に配慮しつつ、他集団に対してもアプローチするような組織マネジメントが行われてきたことを指摘した。

各教会が立地する地域的コンテクストについて、日本最大の在日コリアン集住地域である生野区に立地する大阪教会の社会活動は理念上、誰もが参加できるものの、実際の参加者は地域の特徴を反映して在日コリアンが中心で、彼／彼女らに配慮したプログラムが設けられてきた。こうした地域的な特徴が、マイノリティ全般の包摂というベクトルだけでなく、在日コリアンのためのエスニック・チャーチという「伝統」も維持している同教会の組織マネジメントにつながったと考えられる。広島市に立地する広島第一教会の場合、市内に競合する在日コリアン教会への古参信者の移動がみられ、かつ同教会以外に韓国系ニューカマー向けのオーソドックスな教会が市内になかったため、「伝統」を維持・継承する人材が不足するとともに韓国系ニューカマーが参与し実質的に教会を支えるようになった。そのため、同教会は在日コリアンのためのエスニック・チャーチという形態から変質し、日本宣教を掲げる一方で韓国系ニューカマーも包摂するような組織マネジメントを行うようになったものとみられる。首都圏を代表する在日コリアン集住地域の一つである荒川区に立地する東京福音教会の場合、同地域内に林立する新興の韓国系キリスト教会とは異なり、戦前から同地域に根ざしながらも韓国系ニューカマー牧師を迎えているというオリジナリティを有していた。そのため、多くの韓国系ニューカマーが押し寄せ、牧師の発言力も相対的に強まっていったが、在日コリアン長老主導の教会運営を変革するには至らなかった。だが、韓国系ニューカマーの存在は同教会において欠かせないものであることから、「伝統」に則った教会運営に反しない程度にそのニーズにも対応する組織マネジメントを行うようになったと考えられる。

以上の考察から、長老制における牧師 - 長老間の力関係のグラデーションと各教会が立地する地域的コンテクストは、ともに各教会の組織マネジメントを左右した要因だといえる。

これまでの議論から、本論文の成果として①エスニック・チャーチの継承／変容という観点から在日コリアン教会の複数の変容パターンを析出した点、②教会内のコリアンのエスニシティが重層化したことを契機とした変容パターン（従来のエスニック・チャーチからの変化のかたち）を実証的に論じた点、③在日コリアン教会の展開上の差異を決定づけた組織マネジメントが、宗教組織内外の要因によって規定されていることを指摘した点があげられる。

①について、そもそもエスニック・チャーチを対象とした研究は、日本においてはニューカマーの宗教が主流であり、その継承／変容は論じられにくい傾向にあった。本論文で示した多様な変容パターンによって、エスニック・チャーチの継承／変容論の一端を示すことができたと考えられる。②について、在米コリアン教会の先行研究では、移民二世や三世の世代交代によるエスニック・チャーチの組織変革といった観点からの分析は多いものの、新旧コリアンというサブ・エスニック集団間の関係がもたらす組織への影響について実例を持って考察したものは少ないといえる。本論文の知見から、同じ宗教を信仰しながらもそれに対する取り組み方や宗教的実践の異なるサブ・エスニック集団の参与が、それまで維持されてきたエスニック・チャーチとしての機能

を変容させるだけでなく、韓国系ニューカマーの奉仕によって老人大学の活動が維持できている大阪教会の事例のように、むしろ従来の機能を部分的に持続させる要因ともなりうると指摘できる。③について、「移民と宗教」研究において、宗教（組織）内部だけでなく、地域社会との関わりを論じることが重要であると指摘されているが（高橋 2013: 442）、本論文はそれを実証的に示した一例だと位置づけられよう。

今後の課題としては、第一に本研究で扱えなかった在日コリアンの非集住地域におけるキリスト教会との比較検討、第二に教会組織だけでなく個人レベルの教会選択・移動とアイデンティティの絡み合いといった点を踏まえて、総合的に在日コリアンとキリスト教の関係を論じる視点が必要だと考える。

## 参考文献

- 高橋典史, 2013, 「外国人支援から見る現代日本の「移民と宗教」」吉原和男編『現代における人の国際移動』慶應義塾大学出版会, 437-456.
- 渡戸一郎, 2006, 「地域社会の構造と空間」町村敬志編『地域社会学講座 1 地域社会学の視座と方法』東信堂, 110-130.